

KitaraボランティアからのKitaraボランティアによる、Kitara大好きな皆さんへの情報発信誌

Symphonia Kitara

チェロに魅せられて

オーケストラで主に中低音部の旋律を担当するチェロ、アンサンブルで重要な役割を担うチェロ、札幌の美しい弦の響きのいわばまとめ役のチェロ。その副首席を務めたこともある名プレイヤーの武田芽衣さん。武田さんに研鑽経過とチェロの魅力をまとめていただきました。

チェロ、そして恩師との出会い

7歳の時にたまたま同じ団地に住んでいた母の友人がチェロを習っていて興味を持ち、近所の先生を訪ねていったのがきっかけです。なんとなく、すんなりとすぐにその場で弾けてしまったため、その先生が面白がって「私もっと凄い先生知っている!」と、いきなり大先生(故徳永兼一郎氏)の下へ連れて行かれたのが全ての始まりでした。

それからは、徳永先生に褒められたい一心でチェロを続けました。先生の下では子供の生徒は私しかおらず、とても可愛がってくださったこともあり、私ってちょっと天才かも?とっていました。そんな勘違い期を経て、中1の時大好きだった徳永先生が病に倒れ、亡くなってしまいます。身近な人の死に直面したのは先生が初めてだったため、とてもショックでした。そんな先生の死からほどなくして、今の恩師、毛利伯郎先生の下へ。そこで、初めて同じ楽器の同年代の先輩や後輩たちに出会い、世の中にはこんなに上手い、努力し切磋琢磨している子たちがたくさんいるんだ!と世界の広さを知り、ショックと同時にとても刺激を受け、真剣にチェロに取り組むようになっていきました。

アンサンブルに魅せられて

幼少期から、桐朋の音楽教室へ通っていましたが、毎週土曜日に弦楽合奏の授業で仲間たちに会うのがなにより楽しみでチェロを続けられました。桐朋の音楽高校へ進学してからは、仲間たちとの室内楽やチェロアンサンブルに狂ったみたいに明け暮れる日々でした。そしてもっともっとアンサンブルを極めていきたい、ゆくゆくはオーケストラプレイヤーとして、また室内楽のエキスパートとして活躍している恩師のようになりたい、と思うようになりました。今思えばこの時期にたくさんの室内楽やアンサンブルに出会い、人と合わせることに魅了されたからこそ今があるな、と思います。この時、色々なジャンルや時代背



留学時、レッスンで訪れたギリシャにて
左から 織田美貴子さん(元札幌) 岡部亜希子さん 武田芽衣さん

景の作曲家をたくさん知ることができ、心の底から音楽を好きになりました。

札幌との出会い

大学卒業後は1日でも早くオーケストラで弾きたいとの思いから、富山にある桐朋学園オーケストラアカデミーに在籍しながら色々なオケにエキストラで出演しました。札幌に初めてエキストラ出演した定期演奏会(忘れもしない尾高さん指揮のブルックナー!)は豪雪で飛行機が2日間欠航し延泊することになり、もう一生北海道から出られないかも!と泣きましたが、本当にその後北海道人になってしまうとは、その時は思いもよりませんでした。

そんななかオーディションがあると聞き、受けさせていただきました。北海道は祖父が神恵内村出身なのと、学生時代にPMFに参加していたので縁を感じていました。入団後まもなく、副首席のお話を頂いて5年間務めました。まだ入団まもない新参者に大役を託してくださり、のびのびと自由に弾かせてくれた札幌と当時のチェロセクションの皆さんには感謝しかありません。その時の経験は私の音楽人生においても、かけがえのない財産となりました。

留学

副首席在任中に、アフィニス音楽祭に参加し、そこでミュンヘン音大で副学長をされているウェンシン・

ヤン先生に出会いました。留学に少し興味はありましたが、当時そこまで真剣には考えていませんでした。音楽祭中にヤン先生のレッスンを受けて、先生の下で学びたいとその場ですぐにお願ひしました。体の大きさや身体的に恵まれていることもあるかと思いますが、ヤン先生は日本人にはない無理のない独特な音の出し方をします。力の抜き方やヤン先生お手製のエチュード等、1年間みっちりレッスンしていただいたことを今でも思い出します。また、1年間たくさんさんの演奏会に通いつめ、良い音をたくさん浴びることができたのも宝物です！

チェロの魅力

なにより、その音色ではないでしょうか。チェロは弦楽器のなかでも、人の声に最も近いと言われていますが、一人ひとりの音色に特徴や個性が出やすい楽器のようにも感じます。

好きなプレーヤーはたくさんいますが、やっぱり一番の推しは昔も今も変わらずジャクリーヌ・デュプレです。あの力強い姿に憧れて幼少期は何度もデュプレの映像を見て真似していました。デュプレのようにはいかなくても、40代に入り更に自分の音を追求し続けようと思っています。

オーケストラのなかでのチェロの役割は、様々です。その音色の魅力から美味しい旋律を受け持つことも多々ありますし、幅広い音域なので、ベースラインや内声を弾いたり、飽きることがありません。チェロは座って弾くので、身体的に無理のない姿勢で弾けます。それで、チェリストはカザルスをはじめ長生きな方が多いのかも?! 長い人生の楽しみにもぜひチェロをお勧めします!

プロフィール: 桐朋女子高等学校音楽科を経て、同学園大学チェロ科を首席で卒業。第6回札幌ジュニアチェロコンクール最優秀賞受賞。宮崎国際音楽祭、PMF、小澤征爾音楽塾等の音楽祭に参加。2009年5月札幌交響楽団に入団。

チェロって、なかなかの花形楽器です。アンサンブルの時、特にその響きは光ります。武田さんのソロリサイタルを聴いたことがあります、その鮮烈さを今も覚えています。(担当 大岡 康利)

こうしてピアニストになりました

安田 文子

いくつかの出会いがあって、ピアノの道に進むことになりました。

お稽古ごととして始めたピアノですが、偶然にも7歳の時から、北海道のピアノ教育の草分けともいえる遠藤道子先生に指導を受けることになりました。情熱を持って教えてくださるレッスンはとても厳しく、しばしば泣き出してしまいましたが、弾けるようになった時に



は、とても喜び褒めてくださって、生徒のやる気を引き出してくださる先生でした。面倒見がよくて、きめ細やかな心遣いをしてくれる先生とともに歩んできたという感じです。

ポーランドに留学し、ホームステイでポーランド人とはほぼ同じ習慣で生活することになり、ふだん見聞きする西欧とは違う、東欧ポーランドの文化に毎日が驚きの連続で、知らないことはたくさんあると実感しました。

ずっと助言をいただいているポーランドのピオトル・パレチニ先生は、とても冗談のお好きな朗らかな方で、いつも励まされました。札幌にいらした時は、雪の多さに驚かれたり、北海道の食事を楽しまれたりしていたこともよい思い出です。ショパンの楽譜は出版社によって違いがあったり、出版後も弟子の楽譜に書き入れたりしていて、どれがショパンの真の意図する音楽なのかかわからないところがあります。そのショパンの楽譜をポーランドの国家事業として編さんしている「ナショナル・エディション」にお詳しいパレチニ先生の指導で、ショパンに対する取り組み方が変わりました。

ショパンの時代から歴史に翻弄され続けてきたポーランド、人々は辛かった経験を口々に話します。長かった苦難のため、ポーランド人は困っている人には、すぐに救いの手をさしのべます。

今、ポーランドの隣国ウクライナでは紛争が続いていますが、ポーランドはウクライナから100万人もの難民を受け入れているそうです。ポーランドの音楽家たちも不安を口にします。1日も早く平和が訪れますことをお祈りしております。

プロフィール: 札幌市出身。東京藝術大附属高校、同大学を経て、ポーランド国立ワルシャワショパン音楽院に留学。ポーランド研究会を主宰し、ポーランドの音楽、文化の普及に努めている。



萩
カット:小川悠紀弥

編集 後記

生まれは川崎ですが、おじいちゃんが後志・神恵内村ご出身とのこと。縁あって北海道で家族を持つことになった武田さん。札幌では勿論、北海道で欠かせないチェリストです。ずっとポーランド音楽を追究し、コンサートではポーランドのお菓子をくれる安田さん。(や)

意見感想: 札幌コンサートホール平田宛 ✉ volunteer@kitara-sapporo.or.jp

2024年10月15日発行 発行者: 堀川 正和 編集責任者: 大岡 康利